

# 平生夙三郎と甲南学園（上）

砂原 教男

## Hachisaburo Hirao and Foundation of Konan educational Institutions (1)

Norio SUNAHARA

慶応大学の福沢諭吉、早稲田大学の大隈重信、同志社大学の新島襄はあまりに有名だが、私立の学園は当然創立者を持っている。阪神間にある甲南学園の創立者は平生夙三郎である。甲南学園は今年で90年を迎え、彼の膨大な日記が学園によって復刻刊行されることになった。

幸い、彼の日記を読み、検討する委員会に卒業生の一員として参加できることになり、その日記を全部ではないが、ある部分はかなり細かくよむ事が出来た。平生夙三郎の研究は、既に甲南大学から多くの人の共著という形で刊行されている。そこで、これらの研究にみちびかれつつ甲南学園の創立の事情を明らかにしたい。

平生の甲南学園の特色は七年制高校で停まったという点であろう。彼の日記にはいくつかの場所で、理想的な大学を作りたいと繰り返し述べているが、実際には、七年制高等学校という全国で僅か九校しかない学校を作ることでは終わらざるを得なかった。

第一次大戦、そのあとの経済の混乱、軍部の台頭と専横、それに対処できなかった当時の政権の無策という事情がかさなり、不平、不満を述べつつも川崎造船所の危機救済への関与、満州よりもブラジルとの結びつきを重視することによって軍部の大陸侵略を防止したいとの努力にも拘わらず、結局戦時体制に巻き込まれて行って終った。この段階では、平生の口からは大学の創立という言葉は出なくなったようである、少なくとも日記を読む限り。

だから、甲南学園は阪神間の富裕階層子弟の特権的な帝国大学への特別なルート、中学課程に入れば帝国大学入学が保証されるというルートを持つ全国でも九つしかない七年制高校で満足せざるを得なかった。

当時の帝国大学に入学できる旧制高校三十八校中、七年制高校九校の生徒数は約十六パーセントを占めるに過ぎなかった。

はずれもあったのだろうが、僕が大学を出て大阪府立高校に就職した時、既に大阪府教育委員会の人事担当者の中には、七年制高校の位置づけすら知らない人がいた。最近もある本で甲南の中学校の設立は明記されているが、高校の創立は完全に無視されていたのには驚いた。僕は七年制高校の最後の卒業生であり、同時に旧制大学の最後の卒業生である。わが母校への思

いをこのような形で記してみたい。

### 平生釼三郎とは

平生釼三郎は千八百六十六年（慶応二年）五月二十二日美濃国（現岐阜県）に永井備前守の家臣田中時言の三男として生まれた。翌慶応三年に大政奉還になり、時言は七百円の公債を与えられて武士生活を終えた。田中家は男女十人の子たくさんなので、現在の時価で言えば一千万円くらいにはなるだろう公債でもまかなえず家計は逼迫してきた。時言には傘の骨を削ったり、野菜を販売する位しか方策がなかった。

平生は、我が国最初の教育法規と言われる「学制」が制定された翌明治六年に、藩校時代には憲章校と言われていた加納小学校に入学した。当時の小学校はすべて市町村によって賄われており、児童は五十銭程度の負担をしていた。明治十一年に小学校を終わったが、父時言は学費の工面で中学への進学を躊躇させた。

平生の兄は奨学金を得て師範学校に入学していたが、釼三郎は十三歳で師範学校入学の年齢に達していなかった。当時の制度で給費制度のあるのは師範学校、高等師範学校、陸軍兵学校、海軍士官学校であったが、医学校の受給年は十六歳、他は十八歳であったので、まだ十三歳の釼三郎は無理であった。父は学費の工面ができかねた。然し親はとにかく入学だけはさせようと決心して、学校へ赴くと入試の当日であった。願書未提出で入試拒否されたが、翌日小学区取締（＝視学）と同道して交渉し、小学校卒業者は無試験入学出来ることになっていることが判明し、無事入学できた。当事者は誰一人として、そんな大事なことも知らずにいたほど、混乱していた。

釼三郎は教科書代は払えない状態であったが、休時間や放課後友人の教科書で勉強し、入学後半年目に行われた試験では二番であった。

規定では三番までの生徒は臨時昇級できた。一級上に行けたが、学資が続かなかった。近所の家で読んだ新聞で、外国貿易で身を立てる事が出来ると知った釼三郎は、父の了解をとり退学届を出し、横浜に向かった。

商館のボーイの口が見つかる迄と兄譲宅にいるときに、東京外国語学校露語科の給費生募集の事を知り受験、二十倍の競争に勝って入学した。同級生には二葉亭四迷（長谷川達之助）がいた。

東京外国語学校は五年制で仏独露漢朝の五カ国語を教えていた。

明治十八年内閣制度が導入され、つれて色々の改変が行われたが、外国語学校の廃止もそれで、独仏の二科は大学予備門に併合され、露漢朝の三科は東京商業学校（旧商法講習所）の三部に移された。しかも、外語の校舎は商業学校のものにされてしまった。しかも翌年には語学部が廃止されてしまった。二葉亭四迷はこの機会に文学で身を立てるべく出て行った。

商人にならんと心に決めて加納をでたが、給費生になるために露語を勉強することになっていたの、商業学校に移ること自体は問題なかった。問題は学資。とにかく二月六日に入学試験を受けて夙三郎は合格した。だが、給費生ではなくなってしまった。学校は三月に始まる。大隈重信に学資の支援を願い出たこともあったようだ。万策尽きた夙三郎は父の知人の友人から話のあった養子話に応じ、岐阜区裁判所判事補で旧岸和田藩士の平生忠辰の一人娘の婿になった。

所が、矢野二郎校長は、外国語学校で常に長谷川と一二を争っていた平生を給費生にすることを政府に認めさせたのである。平生の養子話を聞いた校長は自分に相談せずに、そのような話を決めた事に激怒した。自分の軽挙を恥じ、校長の温情ある行為に感謝したが、これ以後平生は矢野校長に頭があがらなくなってしまった。

明治二十二年には東京商業学校は高等商業学校に昇格し、翌二十三年七月に主席平生以下四十名が第一回卒業生として巣立っている。外国への赴任を希望したが、それまで同校の助教諭（月給二十円）に採用されている。

明治二十四年二月に国の要請で矢野校長は、平生を朝鮮国の仁川海関（税関）に補助員として赴任させている。

当時の朝鮮国の税関は外国人が実務を取り仕切り、全部英語で行われていた。六ヶ月の見習い期間中は五十円だったが、それ以後は六十円であった。

彼の英語がどの程度であったのかは分からないが、自分の勉強もあって、夜間、貿易商の若い店員を集めて英語を教えだした。最初は平生の借家で授業が行われたが、人数が増えたので小学校の一室を借りて行われた。この教育は仁川の居留民達には非常に歓迎されていたので、日本に去ることになった平生には金時計が贈られたそうであるが、この学校はイロイロの曲折はあったが、現在商業高校として仁川市によって運営されているそうである。

自分の英語力をつける為もあったが、学校経営に興味があったらしいと言うことは、後の平生の事績からみて興味あることである。

明治二十六年四月には矢野校長の要請で兵庫県立神戸商業学校校長に転じた。ここも僅か一年三ヶ月で、矢野校長の要請で東京海上保険株式会社に入り、実業界に転ずることになった。

仁川を去ることには大分躊躇ったらしいが、東京海上の事情が非常に差し迫った状況で、平生の先輩の各務鎌吉が英国に渡ってロンドン事務所の整理をしなければならなかったの、その間会社の面倒を見る人間が必要だった。相談を受けた矢野校長が平生を推薦、移らざるを得なくなった。

平生は大正十四年、六十一歳まで三十二年にわたって大阪・神戸支店長として、更に専務取締役として東京海上を率いていった。

## 人生三分論

平生は四十代半ばころに「人生三分論」の考えを持っていた。二十代迄を修業の時代、二十代から五十代までを自立の時代、五十代以後を奉仕の時代と考えていた。

平生が最初の教育施設として甲南幼稚園を創立したのは明治四十三年、四十五歳の時である。

甲南学園には四法人、甲南学園、甲南女子学園、甲南小学校、甲南病院があり、総ては旧住吉村と旧本山村にあった。現在は甲南女子学園と甲南学園の経営する甲南高校中学校と甲南女子学園は芦屋市にあるが、残りは何れも神戸市東灘区にある。この中で『甲南』のルーツは小学校的の経営する幼稚園である。幼稚園創立頃の行政区では武庫郡住吉村である。

神戸、大阪間に鉄道が敷かれたのは明治七年(一八七四)である。開業当時のダイヤは上り、下り八本、大阪－神戸間の所要時間一時間十分、運賃四十銭であった。途中の駅は、三ノ宮、西宮だけだったが、開通一月後には住吉、尼崎が開設され、乗客も増え大正十年ころの住吉駅の旅客列車は上り三十一本、下り三十本で、一、二等客は東京の大森駅に次いで住吉駅が多かった。

住吉駅は設置当初は酒造所のある南側のみであったが、大阪、神戸の財界人が、北部の観音林あたりに邸宅を構えだしたので、駅舎が北に移され二等待合室が設けられ、赤帽と呼ばれた手荷物運搬人がいた。勿論駅前には数台の人力車が客待ちをしていた。

交通の便が良くなるに連れて大阪から移り住む人が出てきた。最初は朝日新聞の創業者の一人村山龍平のようである(明治三十三年)。今でも香雪美術館のある弓弦羽神社東側の土地数千坪を所有している。次いで住吉川東岸に一万坪を超える土地に久原御殿と言われた回遊式庭園を持つ大邸宅を構えた久原鋳業株式会社の久原房之助が住み、以後続々と大邸宅が建てられた。

明治三十八年になると住友合資会社理事田邊貞吉が村から二千坪以上の土地を借り受け邸宅を構えたが、彼の薦めで大正十四年には大阪天王寺の茶臼山から住友本邸も移ってきている。住友家では移転に先立ち専門家に慎重に気候、風土、水質を調査させたが、日本随一との結果を受けての移転であったと言われている。

明治四十年には八百戸であったのが、日露戦争後の大正三年には千六百戸を数えるに到った。平生が住吉に八百坪の土地を入手し住みだしたのは明治四十二年七月であった。

大阪から日本随一の環境を求めて多くの財界人が住吉村に住みだしたが、住宅以外の娯楽施設のない地域であったので社交倶楽部が作られた。観音林倶楽部である。明治四十年阿部元太郎、田邊貞吉などが発起人になり、住友本邸の裏に木造二階建ての会館が建てられた。ここでは講演会や講話会が開かれ、会員は碁、玉突き、謡曲に興じ、図書室も設けられていた。

この建物は戦後まで残っていたが、財団法人住吉学園に譲渡されてしまった。この倶楽部が

所謂阪神間のモダニズムに果たした役割は大きいし、平生の苦闘した甲南学園の創設・発展にも計り知れない役割を果たしたはずである。倶楽部で集うメンバーの助言、協力があったからこそ平生の夢は実現出来たのである。

### 甲南幼稚園及び小学校の創立

当時、幼稚園は小学校ほど普及しておらず、中流以上の家庭の児童の通う贅沢なものと考えられていて、住吉村にはなく、西隣の御影町には既に明治25年に町立として設けられていた。

住吉村立小学校ではとても良家の子女を入学させられる状況ではなかった。明治十一年設立の御影師範附属小学校があるが、この小学校創立の際、御影町の小学校として設立するとの約束で地所を無償で上納したので、御影町在住者以外は受け入れないとの状況だったので、移住してきた財界人を中心に明治四十三年初め頃には私立の幼稚園、小学校の設立の声が上がった。発起人の中に教育に携わった経験者がいなかったのも、兵庫県立商業学校校長の経験があった平生に発起人になるように要請されたが、その当時の平生には、扶養すべき家族も多く、収入もまだ少なかったのも、金銭的負担はしないとの条件で発起人になった。

同年十一月頃には住吉村反高林の村有地に設立せんと決め、日本生命を創設した弘世助太郎や住友合資の田邊、日本住宅株式会社社長阿部元太郎など十名に平生が加わって住吉村と交渉し、明治四十四年一月、村会の決定を受けて一千五百坪の用地を無償で譲り受けた。明治四十四年七月認可を受け、寄付金を募り、久原から、大谷光瑞が二樂山上に建設したが二年間しか続かなかった中学校の廃材を譲りうけて建設した。九月十日甲南幼稚園は園児四十四名で発足している。

翌明治四十五年二月には田邊、弘世、平生ら計七名が兵庫県庁に甲南尋常小学校設立願を提出、翌月には認可されている。開校時、十二名一クラスの小さな学校であった。明治四十五年七月に財団法人の申請が出され、大正元年九月には認可され田邊貞吉が理事長に阿部、平生ら数人が理事に就任している。

この段階までは平生は理事として参画している程度で、平生の学校とはとても言えない。

住人が少ないため、小学校、幼稚園の維持は授業料だけでは間に合わなかった。経費は常に不足がちであった。発起人が責任をもって近隣から募金するとなっていたが、これが守られず、平生の近隣から既に他人が集金している事態が起こった。平生は募金を募って不足金を解消するという手段は労多くして功少ないと思い、自己資金を出してその責を果たし、且つ甲南小学校を自ら背負って立とうと決心したと『自伝』は明記している。

事態は一向に解消せず、大正三年には解散廃校を考えざるを得なくなったようである。激論の末、平生の責任で事態の解消に努めることを承認して貰って、久原に援助を求めた。午後四時に始まった話し合いは夕食を挟んで夜十時に及んで次のようになった。

理事は向こう三年間不足額を負担すること。負担割合は次の通り。

久原房之助—二十四分の十二、田邊貞吉—二十四分の四、才賀藤吉—二十四分三、阿部元太郎—二十四分の二に対して平生他二人は二十四分の一であった。

平生は「この覚書こそ私立甲南小学校をして今日あらしめたる最も貴重なる協定書」で「同校のために永久に保存すべき宝物」と述べるだけでなく、「甲南小学校の基礎が定まりて今日の教票を得たればこそ、甲南高等学校を建設する機運を生ぜしめた」と高等学校への展望を述べている。

### 甲南中学校の創立

大正七年春には甲南小学校の第一回卒業生が出る。当然中学校へ入学しなければならない。公立としては兵庫県立第一神戸中学校と兵庫県立高等女学校しかなく、私立としては男子校としては明治二十二年創立の関西学院、四十四年創立の報徳学園、大正六年創立の甲陽中学校、女子校としては明治八年創立の神戸女学院、明治十三年創立の神戸女子神学校、頌栄保母伝習所、明治二十五年創立の松蔭女学校などがあるが、理事者達からは新しい中学校を設けたいとの意向が強かった。

資金の目途がつかないで困っているときに、海運業者である河内研太郎ら4人が合計三十万円の寄付を申し出た。これに続いて安宅商会の安宅弥吉、山下汽船の山下亀三郎、岩井産業の岩井勝次郎も寄付を申し出てきた。そこへ、久原房之助が三十万の寄付を申し出たので、大正七年六月、中学校創立事務所が小学校に置かれ。平生、久原、安宅、伊藤忠兵衛など八人の理事が就任した。

敷地はいくつかの候補地の中から本山村岡本の、西本願寺第二十二代目の門主大谷光瑞が建てた二楽荘の裾野に広がる一万坪に決められた。付近には梅林があり稲穂が広がる田園であった。

甲南学園を語るとき、忘れてならない人物がいる。久原房之助である。前述のように住吉川の東側で国鉄と山手幹線の間に広大な邸宅を構えていたが、第一次大戦後にゆきずまり、放棄された廃墟が長らく電車の窓から眺められた。

久原は平生の三年下で、明治大正は実業家として、昭和期は政治家として名をはせた。

久原は山口県萩の生まれで、いわゆる藤田三兄弟の真ん中で、久原家に婿養子として入った庄三郎の息であった。房之助十一才の時、久原家は大阪に移っている。

房之助は明治十四年商法講習所（のちの東京商業学校）に入学、ここを終えたと慶応義塾に入学、明治二十二年慶応義塾を卒業している。

三田の講演会でアメリカに雑貨貿易の道を開拓した話をした森村市左右衛門の講話に感激し

た久原は、金持ちの息子などは雇わないと言う森村の会社に何度も足を運んで臨時雇いの倉庫番として入社した。その働きに感激した森村が房之助をニューヨーク支店に派遣しようとしたが、長州藩毛利家の相談役井上馨侯の反対で、結局森村組を退社して、明治二十四年宇治田組が経営していた秋田県の小坂鉱山に赴任した。

小坂鉱山は銀山であったが、明治三十年三月の貨幣法で、それまでの銀本位制を金本位制に改めたので、銀価格は暴落し小坂鉱山は苦境に立たされた。

融資を受けた毛利家から小坂鉱山の売却、経営からの撤退の条件を通告された藤田家は、房之助を中心に銅鉱山への転身を計り、低価格での銅の産出に成功した。

財産を藤田三家で分けることになり、その資金で房之助は、かねてから調査していた日立村の赤沢銅山を買収して、日立鉱山を操業、鉱山内に鉱山用電気機械修理工場を設置して、今日の日立製作所の基礎を築いた。

だが、事業は決して容易に発展しなかった。鴻池から融資を受けたが、積極的事业を進展させようとする房之助と意見が合わず、鴻池から派遣されていた所長は中枢の幹部を連れて鉱山を去った。

この事態を救ったのは小坂鉱山時代の部下達であった。数十名の「小坂勢」のお陰で、事業は発展し、立坑が開削され、発電所も設けられ、日立製作所の始まりと言われる変圧器を作られた結果、日立鉱山の産銅量も明治三十九年に二百六十トン、四十年が七百七トン、四十一年には千八百七十二トンと飛躍的に増大し、四十五年には七千八百三十四トンに達している。久原は山間僻地に理想社会を打ち立てようと考え、一山は一家であるとの考えで、家賃、光熱水費無料の社宅を設け附属病院、郵便局、学校、ついには遊興・娯楽施設まで完備して、「久原の日立か、日立の久原か」といわれるまでになった。

久原の本宅は本山村であったので甲南幼稚園、小学校の設立の発起人にもなっていなかったのに創立費の四分の一を負担している。

入学者僅か十二名にすぎないので、園舎建築費もまかなえず、発起人の中から手を引く人も出てきて田邊貞吉、才賀藤吉、平生ら五人だけになり廃校すら考えられたときに、またも久原に救いを求めた。一度は、学園の発起人でもないのに負担は重すぎると断ってきた。

しかし平生が直接援助を求めたので、結局久原が半分を負担することでこの危機を乗り切ったことは前述のとおりである。久原はそれだけでなく翌年、教員優待基金として一万円を寄付している。

久原は平生の甲南小学校存続への固い決意に答え、当座の必要資金のみならず、事後の資金への手当てを保証したので、平生の将来への希望に向かって大きく前進することが出来た。

大正七年に小学校の第一回卒業生が出るまでに中学校を作らねばならなかった。前の年から



理事の間で話題にはなっていたが、資金のめどが立たなかった。

中学創立に踏み切らせたのは前述の通り海運業互光商会の河内研太郎であった。彼は同社社員等と共に三十万円を寄付してきた。感激した平生は知人の安宅弥吉（安宅商会）山下亀三郎（山下汽船）岩井勝三郎（岩井産業）に呼びかけ寄付の承諾を得て中学創立事務所を甲南小学校におき、七月創立委員会を設けた。久原房之助が三十万円の寄付を申し出たので、十一月に田邊、河内、平生、伊藤、安宅、千浦、四本それに久原を加えて八人の創立委員が決まった。

敷地は本山村村長の所有地一万坪と決まった。

委員会では寄付の集めやすさから小学校とは別の法人「財団法人甲南学園私立甲南中学」として文部省の認可を得た（大正七年十二月二十日）。

入学式は大正八年四月二十一日に行われ、甲組二十七名、乙組二十八名、計五十五名、校長を含む教員七名でスタートした。選挙の結果初代理事長に田邊貞吉がついた。

尚、大正八年四月二十日の甲南中学校創立委員会の席上、安宅弥吉が高等女学校設立の必要を述べた。平生は中学校に専念するため、女学校の件は安宅にまかせることとし、安宅を中心に募金が行われ、平生もこれにも協力し、大正十年十一月二十七日に女学校の新校舎の落成をみた。理事長は甲南学園と同じ田邊貞吉が附いた。

甲南グループは甲南学園甲南小学校、甲南学園、甲南女子学園のそれぞれ別個の学校法人であるが、「全き人格を第一義とし、個性に応じて天賦の才能を伸ばし、自ら学び、自ら工夫研究する創造性をもった人間を作る教育」をめざして作られた学園であることを共通の目的にした学園である。